第５学年　総合的な学習の時間　学習指導案

山形市立第三小学校　　教諭　　熊谷　周

１．単元名　　いろいろな人が安心できる三小学区に

２．単元の目標

・　障がいのある人や高齢者など多様な人のために作られた施設や設備、多様な人を支える福祉の仕組みについて理解し、ポスターにまとめることができる。（知識・技能）

・　バリアフリーガイドマップや社会福祉協議会の HP などをもとに課題を見いだし、三小学区で生活する多様な人々が安心して過ごすために何ができるかを考えたり、学んだことを生かして表現したりすることができる。（思考・判断・表現）

・　三小学区で暮らす人たちがより安心して過ごせるようにするという目的意識をもち、主体的に調べ学習に取り組んだり、体験したことをもとに様々な人の立場に共感したりすることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本単元では「いろいろな人が安心できる町」で三小学区の環境的側面、「いろいろな人が安心できる人とのつながり」で三小学区の社会的側面から福祉について考える。

【環境的側面】

三小学区は山形城主最上家の城下町に近く、鋳物や打ち刃物などの職人の町として古くから山形市の中心部として栄えている。3 つの路線が通っているＪＲ北山形駅や市立図書館の分館も入っている山形市北部公民館などもあり、生活上の利便性は高いように感じられる。しかし、山形市福祉のまちづくり活動委員会を中心に作成している山形市バリアフリーガイドマップを参考にバリアフリー的な視点で学区を見ると、北山形駅にはエレベーターがなく足腰の不自由な方にとって乗り換えが難しいことや多目的トイレやオストメイトと呼ばれる人工肛門の方向けのトイレ、車いす用駐車場の有無などが明らかになっていないところが多いことなど、設備・情報アクセスの面で課題が残っていることも分かっている。

【社会的側面】

三小学区には「サポートスクエアぱおぱお」という障がいのある方が養鶏や豆腐の製造販売をする店舗や、「居場所と学びの場づくり　ぷらいず」という親子で参加することのできるワークショップやイベントを企画している事業所がある。同じ地域の中に障害のある人もない人も、小さな子も高齢者も共に生活しているのだということを実感しやすいというよさがある。

（２）児童観

本学級の児童は、前年度までの総合的な学習の時間の中で三小学区に伝わる「宮町七不思議」や山形県の魅力として紅花や花笠まつりなどについて調べてまとめる学習を行ってきた。地域の施設に依頼をしてポスターを掲示させてもらうなどの取り組みもを行ってきたものの、「モノ」に注目して調べる

活動を中心に進めてきたことから、子どもたちには「今年は人と関わりたい」という意識が高まっている。

また、今年度国語科で学習をした「みんなが過ごしやすい町へ」の学習を通して、バリアフリーのまちづくりや、マタニティマークやヘルプマークのような自分の状態を明らかにするマークについての関心を高め、自発的に調べるようになった。

（３）指導観

本単元の指導に当たっては、児童がもっている「人と関わりたい」という思いを足掛かりに学習を始める。「どんな人と関わっていきたいか」ということをより具体的にしていくと、それまでの他教科の学習から障がいのある人と関わりたい、また、祖父母と同居している児童も多いことから高齢者との関わりをよくしたいという思いが出てくること予想される。また、それに関連するバリアフリーガイドマップや地域の施設・団体の資料を提示し、それらをもとに地域の福祉の現状も捉える。これらのことから、児童らに地域の一員として何ができるのかを考える必要性を高めていきたい。

次に、社会福祉協議会の方に協力を依頼し、福祉についてのオリエンテーションや体験学習、障害のある方からの講話をしていただく。福祉の考え方が特定の誰かに向けられたものでははなく、多様な立場の人が幸福に過ごすための考え方であることを理解し、さらに体験や講話から自分とは異なる立場の人たちの考え方や日常生活の感じ方の違いについて考えたりすることができるようにする。

そして、単元の最後にはポスターに学習した内容を整理するとともに、自分が学習した内容について行動化できるようにする。高齢者との関わりについては祖父母など身近な方との関わりの中で行動化することができるが、障害のある方との関わりについては直接関わっての行動化の機会が少ないと考えられる。したがって、学習した内容で手話を用いた歌の表現や支援方法をロールプレイングで同じ学年の児童や保護者に共有するなど、何らかの形で表現できるようにしたい。

（４）ＥＳＤとの関連

・<u>本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）</u>

【公平性】

障がいの有無による世代内の公平性について考え、同じ学区に生活する多様な人が「安心できる日常生活」を営むことができるようにするために、今現時点で考えられる障壁について様々な立場からの多角的な視野を持つ。

【連携性】

互いの生活を向上させていくために、人同士のつながりが必要であることについて考え、児童一人一人が社会を構成する一員だという意識を持つために、5 年生という学年・発達段階の中でできることはないかを模索する。

・<u>本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力</u>

【システムズシンキング】

自分たちの生活する学区を中心に、地域の現状をバリアフリーの視点から総合的に捉えることができるようになる。また、障害を抱えて生きる人々の心理的な障壁について、インタビューや資料を活用しながらまとめる過程で原因と結果を構造的に考えることができるようにする。

【コミュニケーション力】

異なる環境の中で暮らす人の意見にふれ、自分の経験や考えとの比較をすることで、多様な立場に共感する姿

勢を持つことができるようにする。

・本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

・世代内の公正

障がいのある人もない人も、小さな子も高齢者も安心して生活することのできる環境、関係をつくる必要がある。

・人権の尊重

・幸福感に敏感になる

立場によって安心感を得られる環境、関係に違いがある。また、立場が違っても共通して安心感を得られる環境、関係がある。

・達成が期待されるＳＤＧｓ

目標 10【不平等の解消】

T2. 2030 年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、全ての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進する。

目標 11【まちづくり】

T7. 2030 年までに、女性、子供、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する。

４．単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①障がいのある方や高齢者との関わり方、支援の仕方や福祉の基本的な考え方について理解している。 ②講話を聴いたり、自分で調べたりしたことについて、得た知識をポスターに整理することができる。	①資料や体験をもとにして人との関わりについての課題を見いだし、多様な立場の人が三小学区で安心して過ごすことができるよう自分にできることを考えることができる。 ②学習で変容した考えを基に行動化したり、得た知識をもとに自分にできる表現を選んで他者に伝えたりすることができる	①三小学区で過ごす人たちが安心して過ごせるようにするために意欲的に調べ学習や体験学習に取り組もうとしている。 ②調べたことを基に課題をつかみ、その解決方法として自分にできることを考えようとしている。

５．単元の指導計画（全１２時間）

次	主な学習活動	学習への支援（・）	評価（△） 備考（・）
1	○「三小学区はいろいろな人が安心できる町か」を考える。 ・道路は歩道のあるところが多くて私たちは歩きやすい。障がいのある人や高齢者の方はどうだろう。 ・公民館や駅、大きなスーパーもあって生活には便利だね。 ・私たちの登校はお家の人や指導員さんが見てくれるから安心できる。他の人も見守ってもらえているのかな。	・「いろいろな人が安心できる町」を考える過程で、その物理的な障壁を減らすために「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」があるということを提示する。 ・「安心」の背景に物理的な環境だけでなく、人とのつながりなど心理的・社会的な環境もあることに目が向けられるよう支援する。 ・実地調査への意欲を高めるために、主観的な捉えだけで結ｔ論を出すのではなく、インタビューなどをしながらより客観的な意見を集めることへの価値づけをする。	△ア１ ・
2 3	○三小学区の現状を捉えるために調べ学習をする。 ・障がいのある方が働いているよ ・駅にはエレベーターもないし困った時はだれかに助けてもらえるのかな。	・三小学区内で多様な人が生活していることを実感し、その中で生じる困難や障壁について疑問を持つことができるようにする。 　→地域課題の発見 ・バリアフリーガイドマップ等資料を提示する。 ・「利用者」「労働者」等、どの視点から地域を見とるかを整理することができるように事前に着眼点をしめす。	△イ１ △ウ１
4 5 ～ 7 8.9 10.11	○社会福祉協議会の方に「福祉」について講話いただく。 ・「福祉」は多くの人の幸せを願う考え方なんだな。 ○社会福祉協議会の方に協力を依頼し障がいや高齢者の体験を行う。 ・白杖、車いす体験 ・高齢者体験 　→普段何気なく生活している学校を別の視点からとらえる。 ○障がいを抱える方（視覚・聴覚）にゲストティーチャーとして来ていただき講話いただく。 ・苦しいことが多いと思っていたけれど、様々な工夫をしながら私たちと同じように暮らしているんだな。 ○地域の実情について捉えなおすために、もう一度学区の現状について実地調査を行う。 ・体験してみて、初めは気づかなかったけれど○○が大変かもしれないね。 ○改めて調べたことについてまとめ、ともに同じ地域に生活する人としてどんなことができるのかゲストティーチャーから意見をいただく。	・生活上のどんなところで困難を感じるのかを体験的に捉えたり、具体的な高齢者・障がいのある方の支援の仕方を覚えたりする。 ・健常者が普段感じられない生活上の難しさや怖さとそれをどのように解消しようとしているかをうかがう。 ・体験を通して、より共感的な考え方をできるようになったことを生かし、新たな視点で地域を捉えられるように支援する。 ・多様な人と共生していくために大切だと気付いたことや再度行った実地調査で気づいたことについて伝え、意見をいただく。	△ア１ △イ１ △ウ１
１２ ～	○興味の高まったことについて希望をとり、グループに分かれてどんな行動を起こせるか、どんな表現ができるかについて考える。 ・実際にボランティアを行う。 ・駅などの公共施設への支援方法掲示依頼。 ○ポスターに個人の学習をまとめる。	・直接参加することのできるボランティアを探し、児童だけで行える奉仕活動の考案をする。 ・直接の交流が難しいと考えられる場合は、支援の方法を他の人に共有することに目的を置く。	△ア１・２ △イ１ △ウ２ △ア２